OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』巻五·巻六·巻七翻刻
Author(s)	釜田, 啓市
Citation	懐徳堂研究. 2010, 1, p. 101-143
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24630
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井木菟麻呂
『懐徳堂水哉館先哲遺事』巻五・巻六・巻七翻刻

釜田啓市

懐徳堂水哉館先哲遺事巻五

碩果遺事

碩果ノ事蹟ハ、記録寥々、遺聞亦希ナリ、今僅ニ一二ヲ載スルノミ、篋集ハ大阪圖書館ニ藏スト聞ク、故ニ其書ニ因リテ獲ル所ハ之ヲ畧ス、

○碩果ノ名號

碩果ニハ小字アリシコトヲ聞カズ、想フニ七郎ハ幼時ヨリノ通稱ナルベシ、抑樓ハ少壯ノ頃ニ用井シモノニテ、晩年ニハ碩果ノミヲ用井タリ、多クハ石窩ニ作ル、

○碩果ノ風貌性格

碩果ニハ肖像存セザレバ、其容貌ヲ揣知スルニ由ナケレドモ、母ナドノ話ニヨレバ、「幼穉ノ頃ニテ確ニハ記憶シ居ラザレドモ、唯面ニ痘痕アリテ、コハキ様子ノ方ナリシコト丈ヲ覺ユ、」ト云ヘリ、其性格ニ至リテハ、嚴正勁直ニシテ、蕉園ノ英明ニシテ弘潤ナルガ若クナラザリキ、

○碩果ノ教授并ニ管校職

碩果ハ明和八年辛卯ヲ以テ生マレタレバ、兄蕉園ヨリ少キコト四年ナリ、享和三年癸亥蕉園ノ歿スルニ至ルマデハ、天滿ニ別居シテ、私塾ヲ開キ居タルガ、蕉園歿後ハ懷德堂ニ歸リテ、學校預リト爲リ、明年甲子ニ竹山ノ歿スルニ及ビテ、教授職ヲ承ケ、學校預リヲ兼ネタリ、碩果ニハ嗣ナカリシ故、一旦ハ並河寒泉ヲ養子トシタルコトアリシガ、寒泉ガ舊姓ニ復セシヲ以テ、柚園ノ子桐園ヲ養ヒテ嗣ト爲シタリ、然ルニ其年尚幼小ナリシ故、寒泉ガ代リテ庠務ヲ攝シタリ、寛政再建後ノ懷德堂ニテハ、樓上ニ教授職ガ居リ、下屋ニハ學校預リガ住フ定ナリシ故、碩果ガ樓上ニ居リ、寒泉ガ下屋ニ住ヒタルコトアリト聞ケルガ、想フニ此ノ時ナルベシ、

○碩果ノ經説

壙誌ニハ、潛心經術、往々多闡明、トアレバ、多少ノ經説ハアリシコト、思ハルレドモ、文字ノ上ニ存シタルモノナシ、強ヒテ之ヲ求ムレバ、先兄蕉園ガ盤庚ノ始ニハ錯簡多シト言ヒオキタル説ニ基ヅキテ、序次改定シタル者二枚、國文ヲ以テ左傳中ノ私説ヲ手記シタル者十三四枚アルノミナリ、

○編次鈔寫

碩果ニハ著書ナシ、其編次綴緝セシ者ニハ、履軒ノ史記雕題、戰國策雕題ガ、元本書ノ欄外ニ細書シタルヲ卸書ニシテ、七經雕題畧ノ體裁ニ爲シ、史記三卷、戰國策二卷ト爲シシ者アリ、（戰國策ハ家ニ存セザレバ、刪數差異ナキヲ保セズ）又碩果ハ、書ヲ讀ミテ鈔寫セザレバ、胸臆ニ留ムルコト能ハズトテ、讀書ノ際ニハ、務メテ之ヲ鈔寫シ、又門生ニモ斯ク爲サシメタリ、トノコトナリ、今存スル所ノ手寫本ニハ、春秋亂賊表、春秋闕文表、安齋叢書抄等アリ、

○碩果ノ詩文

碩果ノ文章ハ雄渾勁駿ノ氣魄ヲ缺クト雖、其人格ノ如ク堅正剛實ニシテ、用字行文軌範ヲ逸スルコトナク、一字苟セザル概アリ、

碩果詩ヲ好ム、篇什篋ニ滿ツ、風格精純ニシテ雅正ナリ、尤力ヲ詠史ニ用井タル者ノ如シ、亦咏物ヲ愛ス、人影、碧、涯孩兒等ヲ題トシタル者アリ、
詩文共ニ編ヲ成サズ、並河寒泉塤集ニ次ギテ之ヲ編次シ、題シテ篋集ト曰フ、

○碩果ノ書風

碩果ノ書法モ亦所謂懐徳堂風ノ甄陶ヲ經タレドモ、字體一變シテ其傳承セシ所ヲ得ルニ苦シム、然レドモ子細ニ結構ノ存スル所ヲ點檢スレバ、尚竹山ノ範型ヲ脱セズ、懐徳堂辛丑壽巻ニ載スル所ノ少年時代ノ筆迹ヲ見レバ、其由來スル所ヲ知ルベシ、遺墨中書風ノ變化ヲ見ズ、其磔法ノ向上シタルハ獨得ノ筆法ナリ、
碩果平生大字ヲ作ラズ、細書ハ其得意トスル所ナリ、其詩ノ如キハ、多クハ之ヲ半紙、又ハ書翰用ノ半切紙等ニ書シタリ、其寫字ハ點畫齊整シテ、前後一貫セリ、

○懐徳堂風ノ變遷

懐徳堂ノ學風ハ博約ノ聖訓ヲ遵奉シテ、歴世渝ルコトナカリシガ、懐徳堂風ニ至リテハ、碩果ニ至リテ三變セリ、即當初ニハ町家ノ子弟ニモ自由ニ講筵ニ預ラシメ、專ラ聖道ヲ普及スルヲ務ムルニ在リ、所謂德育本位ナリシガ、竹山ニ至リテハ一變シテ、文藝旺盛ノ時代ニ入リ、道德文章渙發シテ、博約ノ本義ヲ恢宏スルコトヽナリ、諸儒ト交游シテ、文詩ノ應酬ニ行レタリ、竹山蕉園共ニ歿シテ、碩果教授ヲ掌ルニ及ビテハ、歴代傳承ノ學風ヲ自重シ、懐徳堂ノ地位ヲ保持シテ、東西儒家ノ上ニ傑出シタル者ト爲サンコトヲ務メシ者ノ如シ、故ニ學德一世ヲ睥睨シテ、俗間ノ儒流ヲ交游スルコトヲ喜バズ、其出入往復スル所ノ者ハ、社友門下生等、故舊親近ノ外ニ出デズ、其遺稿中ニモ、東肥ノ愛教微雲ニ答フル書ノ外ニ、社外ノ諸家ト贈答倡和セシ文詩アルヲ見ズ、サレバ竹山以上ハ開放時代トモ云フベキニ代ヘテ、碩果ニ至リテハ再變シテ、閉鎖主義ヲ取リタリ、以後ノ懐徳堂ノ講帷ヲ撤スルニ至ルマデ、斯ノ風ヲ遵守セリ、

○碩果ガ政治上ニ關スル事蹟

碩果ノ壙誌ニハ嘗竊勸於平賀明府、表一忠臣、黜一姦臣、時人大悦、トアリ、此ハ碩果ノ事蹟中特筆スベキ事ナレドモ、家ニハ記録ノ徴スベキ者ナケレバ、憾ムラクハ其轉末ヲ詳ニスルヲ得ズ、平賀明府ハ大阪市尹平賀信濃守ナリ、碩果モ亦竹山ノ後ヲ承ケテ、城代奉行等ニ出入シテ、經史ヲ講説シタレバ、此等ノ關係ヨリシテ、忠言ヲ進メタルコトアリシナルベシ、

○碩果ガ理財上ノ伎能

懐徳堂ハ、竹山ノ時代ニハ用度給セズシテ、始終窮迫ノ情態ニアリシガ、碩果ニ及ビテハ社中同志ノ助力ニモヨルベケレドモ、碩果天性資材ノ運用ニ於テ特長ノ伎能ヲ具ヘ、檢勤家ヲ御シテ、宜シキヲ失ハズ、其室篠田氏モ亦家政上節約ヲ主トシテ、頗ル内助ノ功アリタルニヨリ、懐徳堂ノ用度ハ一代ニシテ充足シ、綽トシテ餘裕アリ、藏書類モ、竹山ノ時代ニハ、必要ニ迫リテ僅ニ佩文韻府淵鑑類函ヲ購得セシ位ナレバ、幾何モナカリシニ、碩果ニ至リテハ、未文庫ヲ設クルニハ及バザリキト雖、能ク一代ニシテ汗牛充棟ノ圖藉ヲ貯ヘタリ、（此等多數ノ藏書ハ、碩果ノ時ニハ何處ニ存置セシニヤ詳ナラザレドモ、桐園ノ時ニ及ビテ、文庫一基ヲ設ケテ、之ヲ藏スルコト、ナレリ、是ハ桐園遺事中ニ述ブベシ、）堂背ニハ二十四疊敷ノ庫アリ、此ハ寛政再建當時ノ建設ナレドモ、庫中ニ蓄藏シタル多種ノ家什ハ、大抵碩果ニ至リテ購得シタル者ナリ、其中ニ幾棹カノ簞笥長持アリ、此等ハ歴世ノ婚嫁ノ節ニ新婦ノ携ヘ來リタル者モアレバ、必シモ盡ク碩果時代ノ新調ナルニハアラズト雖、他ニ家具調度ノ平生用井盡サザル程夥シクアリシハ、碩果ノ設備ニ屬ス、又庫中ノ四壁ニ傍ヒテ、十二個ノ頑丈ナル大櫃ヲ並ベテ、米穀ヲ貯藏シ、以テ饑饉等不時ノ窮乏ニ備ヘタリ、櫃前ニハ備餱糧トカ（正確ニハ記憶セズ）題シタルヲ記憶ス、

○碩果昆弟ノ友情

碩果ト蕉園トハ、竹山ノ諸子中僅ニ生育ヲ遂ゲタルコトナレバ、其性格ノ相違シタル所アルニ拘ラズ、友情極メテ親密ナリキ、左ノ一二文詩ニ因リテモ知ルヲ得ベシ、

荊庭拝別、忽爾逾月、弟之懶慢、曠闕馳問、負罪深重、不啻淵嶽、倏辱乎誨、慙悚慙悚、喜承咳勢稍殺、體況休裕、不以弟不肖、永夜耿々、不交睫眶、二蕉兩處之念、爲末迫切、同根眞情、感咽何勝、竹堂畫蕉一幀、筆痕遒逸、佩荷厚貺、既命標褙、須掛弊齋中、以慰翹企、冗務紛若、致謝稽晩、伏乞寛貸、鶉鷇■、謹送得佐陽、羨一啜、幸甚、秋氣厳肅、寒疾易侵爲時保衛、以副膽禱、

九月十二日　曾縮拜復

蕉園哲兄座右

寄家兄

聞説豊侯待士寛、趨陪日整舊儒冠、原非犬馬魯君養、何用車魚憑子嘆、傷心楊柳梅見塚、奪目芙蓉天女壇、歸期莫秋猶熱、只怕蕘山客袖寒、

併シ書牘ノ往復ハ餘ニ好マザリシ由ニテ、蕉園ガ客居中、昆弟互ニ文書ヲ往復センコトヲ望ム旨ヲ竹山ニ云ヒ送リタルニ、竹山ガ返書中ニ左ノ如クアリ、

一　七郎尺牘之事至極尤にて候。早々相申聞候 左様之事少し嫌と筆鈍と相持にて候此事ハ兼而我等も不滿意候

○懐徳堂告文

懐徳堂ニハ、從來重要ノ事ニ遭遇セシ時ナドニ告文ヲ先哲ノ靈前ニ奉ル事ナカリシガ、碩果ニ及ビテ、二回告文ヲ捧ゲタルコトアリ、一ハ懐徳堂創立百年ノ時、一ハ義金募集ノ時ナリ、篋集ニ収録シタルカト思ヘド、今之ヲ左ニ掲グ、

告祖考文

維文政八年乙酉六月七日、不肖縮恭具清酌庶羞之奠、昭告于　皇祖貽範先生、　皇考文惠先生之靈曰、伏惟府庠懐徳書院之設創於享保丙午、　有徳大君振先朝頽綱、宇宙一新、遵聖訓於珠經、本府庶富之民、欲加之以教、　皇祖奉命、

建學施教、勸諭忠孝、靡然嚮化、　皇考大篤前烈、啓廸後人、誘掖諄至、四方矜式、寛政罹災、門牆具燼、越俟當路、蒙　賜營資、朋友助費、堂搆復舊、嗚乎祖考抱有爲之才、値右文之運、明主德意、耀榮于鼓篋之始、良弼廟議、霑澤于馬土之餘、府庠再修、不廢爲榛莽者、豈非天乎哉、先兄聰敏、馳譽詞藝、學正識高、是爲師表、惜夫降年不永、縮不肖承乏教授、任重微、恐廢於半塗、仰念成立外天之難俯戒覆墜燎毛之易、戰兢淵氷、勤儉弗怠、以至今茲、司教四世、歷年一百、具狀告　官、官乃賞我以承緒永久、弗墜先業、又勗我以傳之方來、永世弗渝、鄉黨親戚、執幣來賀、是豈我之績、實　祖考厚德之報、不勝感慕欣躍之至、敢陳菲薦、敬伸虔告、尚其顧歆、永垂庇祐、

不肖縮董沐頓首再拜

告皇祖甃菴先生文

天保癸巳、六月七日、以建學命降之日、恭設几筵、告于
皇祖甃菴先生之靈曰、維昔享保、歲次丙午、官命建學奔走勞劬、堂基斯立、文教大敷、火災蠹毀、不可弗虞、五友保任、謀爲永圖、人逝家亡、一榮一枯、迨皇考世、唯存一家、德必有鄰、其從如雨、親友協心、緩急幹蠱、壬子之災、通財築作、官金盡數、私財無餘、皇考即世、日月逾徂、棟撓屋破、何以修補、祝融爲祟、何以按堵、今而不備、如後患何、義金起議、親昵三五、施及踈遠、彼倡此和、遐邇孚信、輸金夥多、涓々爲河、是不虛語、錙積銖累、大德是荷、急難有備、靡墜遺緒、一家攸存、今復胡秦、懇々諸友、好義代任、姓名具告、明神其安、魚菽菲薦、魂兮來歆、

不肖孫曾縮拜手稽首謹白

義金人名

山片平朔	加藤喜太郎	淡輪元潜	山片平右衞門	永井教篁	樋口十郎兵衞
山片七兵衞	永井藤四郎	島好篤	山片小右衞門	平井大之進	黒崎忠三郎
山片小三郎	清水彌三郎	堺屋直藏	安治義兵衞	古林正見	瀧山泉次郎

長谷川與兵衛　藤井庄五郎　備前屋權兵衛　藤田與市　平瀬宗十郎　井坂禮太郎
藤田九郎兵衛　平瀬九十郎　草間伊助　池上吉兵衛　富子亮右衛門　岡田周藏
黒田源右衛門　五十川七五郎　高一齋　伊藤政藏　田中方安　井坂六郎右衛門
規矩治三郎　山中善右衛門　二高清兵衛　重松武右衛門　大田晉齋　鴻池治助
森三壽　山中鶴之助　岩永文禎　天海屋善九郎　山本彦三郎　筒井新右衛門
龜山貞助　田邊治右衛門　筒井直之助　中川吉右衛門　天滿屋善兵衛　池上彌太郎
大塚義作　伊塚吉右衛門　田中龜太郎　大塚七兵衛　伊塚藤十郎　大田肥後守
革島兵庫　中井雄右衛門　小笠原孝治　并川復一　筱田重五郎　中井七郎

○碩果門人

碩果ノ高弟ハ左ノ二人ノ外ニ聞キ及ベルモノナシ

並河寒泉　別載

山田孝堂　名綱　字不詳　孝堂其號又號大隱清逸通稱養節晩以孝堂行　明治廿八年卒　年七十九　孝堂先生遺稿二巻アリ　藤澤南岳五十川淵三氏ノ序アリ
五十川氏ノ序ニ曰ク　播磨山田孝堂善詩文宗　世爲小野藩醫　少年專攻儒學　來大阪學于懷德堂書院　後下帷與篠崎小竹　後藤松陰　藤澤東畡
奥野小山諸先輩交　弱冠後專治經濟學　問游四方　訪名士碩儒　兼研究醫術　其足跡殆徧天下　年四十欲行江戸　有所爲　以藩命還列醫籍　又兼
儒官藩學大振　明治廢藩後　任飾磨縣學務總宰　功績有可觀　青阮而致仕　住鹿兒川驛　鬻藥爲業　大殖家産云云
孝堂遺稿游爭龍灘記云　皆集灘上旗亭更開盛宴杯觴交錯　詩書管弦以助興人人酣暢　余謂衆曰余幼時寓懷德堂書院　賴山陽翁來訪我先師　翁素嗜
酒　先師不好　飲杯間　暫對活而入室　使余輩二三名侍翁佐興　時談偶及西時耶馬渓之事　翁賞曰云云

右先師トアルハ石窩ヲ指ス也　予先年播州加方門ニアリ　孝堂ガ相識ル漢　石窩ノコトニ及ベバ常ニ先生ト稱ス（孝堂晩年妾ヲ蓄フ　品
行議スベキモノアリ）

逸身君創大成廟于其天王寺別業　蓋懷德書院歸君有也久矣　今用其材以作之云　今茲明治甲午春綱拜謁不堪喜　恭賦一詩以代瓌璨之贄云
高士相謀存舊庠　肅然廟下拜餘光　回頭六十年前事　昧爽挾書朝講堂

○碩果時代ノ事變

碩果在世ノ天保中ニハ、大阪ニ大鹽騒動アリ、當時灘波ノ谷川氏ニ避難シタリト見エテ、左ノ二首アリ、

天保丁酉二月十九日、賊徒蜂起、避火南坡、宿醫師谷川氏、題主人壁

一朝楚炬赭民舍、荷擔狂奔西又東、何料外平避兵溺、窮猿投入杏林中、

翌日仙坡火熸、挈孥還家、

烈火縱燒南北鴻、幾多豪姓一齊空、府庠墻屋依然在、天護斯文襄祝融、

○逸話三件

賴山陽ハ、藝州ヨリ母ヲ伴ヒテ大阪ニ來リタル時ハ、常ニ之ヲ懷德堂ニ宿泊セシムルコト、シタレドモ、（梅颸ハ碩果ノ室貞正トハ伯母姪ノ間柄ニテ、交際親密ナリシ故、）自分ニ出入スルコトハ希ナリシガ、一日謁ヲ碩果ニ乞ヒテ、奠陰集ヲ一覽センコトヲ求メタレバ、碩果之ヲ授ケシニ、山陽碩果ノ前ニ在リテ處々ヲ繙讀シ居タルガ、追々ニ坐ヲ崩シ、身ヲ傾ケ、足ヲ出シ、遂ニハ横臥スルニ至リタレバ、嚴格ナル碩果ノ能ク堪フベキニアラザレバ、怫然トシテ坐ヲ起テ、復出デ接セザリキ、

懷德堂ハ諸役御免除地ノ事ナレバ、藝人物貰ナド、凡テ門内ニ入ルヲ得ザル定ナルニ、石窩教授ノ時代ニ、嘗テ虚無僧ガ門内ニ入リ込ミタル事アリシニ、石窩内玄關ニ出デテ大喝シ、傲岸ナル虚無僧ヲシテ一言ナカラシメタリ、當時一快事トシテ傳稱セラレタリ、寒泉翁得意ノ談話、石窩ニ虚無僧ヲ咏ジタル詩アリ、其時ノ作ト云フニモアラザルベケレドモ、其轉結ノ如キハ、或ハ當時詰責セシ語意ノ一端、亦此ニアリシナルベシ、其詩、

深簔擁面法衣縈、巢鶴狡猨弄管行、怪爾虚無方外士、却成艷冶俗間聲、

大鹽後素ガ幼少ノ頃懐徳堂ニ通學セシコトアリ、一日石嵩ヨリ大學ヲ授讀セラレテ、與其有聚斂之臣、寧有盜臣、ノ句ニ至リテ、寧ト云フ字ガ覺エラレザリシカバ、石嵩記憶ノ法ヲ授ケテ、下ニ敷ク筵(ムシロ)席ノ事ヲ覺エテ居レバヨイト云ヒシニ、翌日來リテ復讀スルニ、ゴザ盜臣アラント讀ミタリト云フ、

○新年自叙ノ作

篋集ニ載スルナラント思ヘド、左ニ抄録ス、

幹枝周匝値新正、夭壽存亡感念生、碩果林梢懸不食、同根地下朽無崩、幸免小人剥廬禍、敢期君子得輿榮、窮愁頓與川氷解、先試兎毫聊寫情、

七袠已開春又至、誦絃無恙讀書堂、舌存猶坐新皐比、歯墜唯甘小宰羊、子曰松苗一匊緑、午窓梅影數枝香、蘧瑗精修六十化、初心不忘舊時狂、

○碩果終焉詩

前賢鄒魯大經備、閑道儉勤心確如、掩棺薫猶名可定、稀年碩果得承輿、

○文正先生襄事録抄

天保庚子三月廿四日寅刻終焉、諡曰文正先生、

護喪　古林正見　並河復一

副　笹脇正元　古林正倫

司書　稲垣犀太郎

司貨　古林正見

訃告　行司

廿六日七ツ時届書之覺　月番西町奉行

口上覺

私義老病ニ付養子悴修治江學問所相續爲致、甥并河復一江教授申付候　此段御届申上候　依而如先例御目見相願候　以上

子三月廿六日　中井七郎　判

堀伊賀守様御内
松本嘉藤太殿
中泉撰司殿
徳山石見守様御内
平光平左衞門殿
松原彌惣右衞門殿

廿七日早天届書之覺

口上之覺

父七郎義病氣之所今曉死去仕候　此段御届申上候　以上

子三月廿七日　中井修治　判

堀伊賀守様御内

訃告名宛

千草屋理兵衞　山片平右衞門　山片小右衞門　米屋彦右衞門

池上吉兵衛　藤田九郎兵衛　千草屋宗十郎　平野屋七五郎
千草屋市五郎　染屋泉次郎　泉屋禮太郎　天王寺屋忠次郎
田邊屋仁三郎　野村八郎　田邊次右衛門　鴻池霧之助
鴻池伊助　山片七兵衛　尼崎屋市右衛門　尼崎屋七右衛門
播磨屋吉右衛門　田中周安　高一齋　寺村日向
佐々木柳庵　岩永民蔵　長瀬七三郎　三井元孺
櫻井雅之丞　千草屋金三郎　岩永文楨　炭屋彦五郎
武田七郎兵衛　泉屋六郎右衛門　加茂越後　廣屋德左衛門
伊藤立言　高池八左右門　虎屋章五郎　佐渡屋市次郎
高池三郎右衛門　天滿屋由太郎　今井官之助　加藤宗三郎
服部眞次郎　岩崎内藏之進　吹田屋彦三郎　内山彦次郎
和田寿八　渡邊十次郎　酒井三平　朝岡盤吾
中村藏太　山本善之助　古屋源之助　河方廣三郎
金谷鎌次郎　渡邊丹後介　寺井龜五郎　平部專右衛門
松田小一郎　淡輪與次郎　河邊多喜衛　野原源之丞
長嶋惣右衛門　小林原右衛門　本多爲助　重松武右衛門
伊勢屋藤四郎　天滿屋善九郎　明石屋庄五郎　加島屋十郎兵衛
島屋市之助　西田耕耘　龜山貞次　川北秀六
中村辰八郎　西山豊三郎　備前屋權兵衛　大門主計
有田求馬　山口彦三郎　早野生三　黒田源右衛門

※「廣屋德右衛門」欄外注　「ココニ廣屋德右衛門トアルハ履軒門人岩崎縄武ノ子又ハ孫ナルベシ　其家は酒屋にて安土町堺筋

邊ナリシヨウニ覺ユ　其家ニハ履軒ガ象外翁ニ贈リタル稲荷山十二景圖ガアル筈之　今如何」

遠方之分

京都 太田肥後守
京都 革島兵庫
龍野 中井常庵
龍野 天野清藏
播州 内山俊齋
尼崎 田中立節
伊丹 丸屋源太郎
御曾根村 花崎林平
伊豫 戸塚宮門
八尾 安田春益
備中 丸川九三

京都 太田伊豆守
京都 大村彦太郎
龍野 服坂敏仁
龍野 井口源左衛門
播州 瀧川耕耘
伊丹 大塚七兵衛
紀州 關掃部四郎
作州 中西眞太郎
讃州 岩村豹藏
八尾 田中啓太

京都 并河右馬大元
京都 波多野良左衛門
龍野 柳生長右衛門
播州 三木程之助
尼崎 柴田小文次
伊丹 伊塚藤十郎
堺 田邊榮左衛門
淀 荒井半藏
讃州 垂水次郎八
各知 小笠原孝治

京都 三木越後守
龍野 藤江濟
播州 按谷左門
尼崎 田中龜太郎
伊丹 伊塚吉右衛門
堺 中村督太郎
伊豫 町田所左衛門
久宝寺 稲垣見立
阿波 坂東連藏

葬列

行列奉行　門内呼出し　木原直藏　門外見繕　平野屋庄兵衛

先拂　作兵衛　塾生

酒井三平　山路恭之助　佐伯福太郎　大門主計
波多野良左衛門　鹽井橘藏　西撰一郎　堀昌言

田中立節

墓標　左海吉介

有田求馬

棺

森田三壽

羽織一刀
大工太右衛門
輿夫六人

輿夫六人
宰領佐兵衛

挾箱　持雇

草履杖兼帯
吉平

修治

若黨　清兵衛

草履取雇

并河復一

若黨　德次郎

草履取雇

小野原元次郎

稲垣犀太郎

革嶋兵庫

小笠原孝次

越達太郎

笹服正元

早野生三

古林正見

堀用庵

古林正備

并河右馬大元

岸田利三郎

古林秀太郎

傘籠　米売男

惣供

傘籠　米売男

此間少々あけ

平野屋庄五郎

木原直藏

山片平右衛門

藤田九郎兵衛

池上吉兵衛

山片小右衛門

加藤喜太郎

黒田源右衛門

惣供清水敏之助　本供

本供

太田肥後守

代谷口德平

本供

清水彌三郎

本供

長嶋惣右兵衛

懐徳堂水哉館先哲遺事巻六

並河寒泉遺事

○寒泉ノ父母

寒泉ノ父ハ京都ノ人ニシテ、誠輔ト稱ス、並河氏、諱尚誠、字叔明、初信所ト號シ、後又巨川ト號ス、母ハ中井氏、名刀自、竹山ノ季女ニシテ、安永九年庚子十一月ニ生レタリ、誠輔ガ中井氏ヲ娶リタルハ寛政七年十二月ニシテ、誠輔廿六歳、中井氏十六歳ノ時ナリ、

誠輔ハ寛政七年乙卯八月ニ京都ヨリ大坂ニ移リ、大川町ニ居宅ヲ賃僦シテ（戸主天滿屋善兵衞）醫ヲ業トセリ、其樓ヲ寒濤樓ト曰フ、蕉園及ビ碩果ノ記アリ、

中井氏二男一女ヲ生ミシガ、享和三年癸亥六月五日ニ卒シタリ、年廿四、名ヲ易ヘテ貞固ト云フ、

誠輔ノ後配ヲ柴田氏ト云フ、諱績、尼崎侯ノ世臣柴田小文治源政寛（柴田家老ノ分家高八十石取也）ノ第三女（清四郎妹）ニシテ、中井氏ノ義女ト爲レリ、並河氏ニ嫁セシハ文化元年甲子三月廿八日ナリ、同八年辛未八月十三日卒、享年廿七、名ヲ易ヘテ貞累ヲ曰フ、

同年同月廿一日誠輔京都西洞院丸太町南ノ僦居ニ卒シタリ、享年四十二、名ヲ易ヘテ誠惠ト曰フ、

○寒泉ノ幼時

寒泉ハ寛政九年丁巳六月朔日亥刻ニ生レタリ、中井氏ノ出ナリ、

竹山歿セシ時、寒泉八歳ニシテ竹山ノ葬列ニモ加レリ、襄事録ニ小一郎トアルモノ是ナリ

寒泉ハ竹山ガ惟一ノ外孫ニシテ、幼時其鐘愛ヲ蒙リシコトヲ聞ケリ、竹山ガ其誕生ヲ祝シテ、破魔弓二把ヲ遣リシコトハ、石窩ノ遺稿ニ見ユ、（奠陰集ニもアリタルやうニ記憶ス）

妹婿巨川育兒、家君貽破魔弓二把、關兒患痘、乃附以一絶、
吾生歳晩嘆蹉跎、孤矢將驅窮息多、君家見今妖氛惡、先屬阿戎破痘魔、

○寒泉ノ兄弟

寒泉ニハ同母ノ弟妹各一人アリ、弟坦次郎、享和三年癸亥九月十五日夭、妹於葩(ハシ)子寛政十三年辛酉二月三日夭、異母妹一人鴛子(ヲシコ)ト云フ、文化三年丙寅二月九日夭、

○寒泉ノ配

寒泉ノ配、中井氏ハ石窩ノ第四女、名ヲ御田(オンタ)ト曰フ、

○寒泉ノ子女

寒泉ニハ二男七女アリ、長男ヲ啓太郎ト曰フ、天保七年五月十三夭、三歳、二男ヲ秀次郎ト曰フ、慶應四年七月十九日卒ス、年二十、長女名ハ於磚、天保元年七月十六日夭、三歳、二女於霜、天保元年十一月朔雙生、中井修二ニ適ク、慶應四年七月廿五日卒ス、歳三十九、三女於朔(キタ)、天保元年十一月朔雙生、百々三郎ニ嫁ス、四女豊菊、天保八年八月三日生、淡輪參郎ニ嫁ス、五女於絢(アヤ)、天保十三年正月廿八日夭、二歳、六女閏菊、初ノ名ハ阿栗(アグリ)、明治廿一年一月廿六日卒ス、年四十六、名ヲ孝閏ト易フ、七女於清(スガ)、弘化四年三月十二日夭、二歳、
第六女閏菊性至孝、弟秀次郎早世シ、姊妹或ハ嫁シ、或ハ夭シテ、父寒泉ヲ扶護スル者ナキヲ以テ自ラ矢ヒテ嫁セズ、父ニ侍シテ孝養ヲ盡シタリ、

○名號

寒泉小字ヲ小一郎ト云フ、後復一ト改ム、其諱朋來、又鳳來ニ作ル、初鵠齋ト號ス、後寒泉ト改ム、寒泉ノ號ハ還暦以前ニ用井タル者ニシテ、其後ハ華甲ノ意并ニ浪華翁ノ義ヲ兼ネテ華翁ト號ス、和歌ナドニハ華の翁ト書シタリ、懐

德堂廢絶後ノ明治十一年比、女婿淡輪參郎ト、櫻宮ニアリ、是ヨリ樺翁ト號ス、是ハ履軒ノ左九羅帖ニさくらニ樺ノ字ヲ當テタル説アルニヨルナリ、人モ亦樺翁先生ト呼ビテ、復寒泉ノ號ヲ冠セズ、因ニ記ス、懐徳堂ニテハ、諸生寒泉ヲ敬稱シテ大先生ヲ曰ヒ、晩年ニ及ビテ老先生ト曰ヘリ、

○寒泉ノ少壯時代

寒泉ハ文化十年癸酉九月廿八日、始メテ懐徳堂ニ遊ビテ、碩果ニ從學ス、時ニ年十七、寒泉ハ碩果ノ養子ト爲リテ、中井姓ヲ冒シシコトアリシガ、（年月不詳）其本意ニアラザルニ因リテ、天保三年壬辰二月ニ復姓シテ、攝州東成郡貝脇村ニ住セリ、又攝州木井小路村ニ居リシコトアリ、其後大坂ニ歸リ、和泉町ニ於テ私塾ヲ開キ、又懐徳堂ニアリテ庠務ヲ攝シタルコトナドモアレドモ、其歳月ヲ詳ニセズ、其和泉町ニ遷リタルトキ、石窩詩アリ、左ノ如シ、

　駕鵠齋并君泉坊新居

韜晦三年羽翼成、寒泉精舍賀修營、記所華胥簡易俗、應用荊室合完情、洛閩正宗閑聖道、陸王邪説誤書生、幽禽出谷遷喬木、喜聽嚶々求友聲、

韜晦三年トアルハ貝脇村ナドニ居タル間ノコトニテ、庠務ヲ攝シタルハ和泉町開塾ヨリ後ノコト、思ハル、

○寒泉ノ修學期

寒泉ハ修學期ニ於テハ、日夕矻々トシテ倦ムコトヲ知ラザリキ、當時最易ノ研究ニ力ヲ用井タリシガ、過度ノ勉學ノ爲ニ肺勞ヲ患ヒタリト云フ、又學力ノ上達スルニ及ビテ、碩果ガ之ニ資治通鑑ノ研究ヲ命ジタルコトアリシ内モ聞キ及ベリ、以テ其修養ノ一端ヲ見ルベシ、

○懐徳堂教授職

寒泉ハ碩果ノ歿後直ニ懐徳堂教授職ヲ承ケテ、廢校ノ時ニ至レリ、

○寒泉ノ學風

寒泉ハ博約ノ堂規ヲ遵守シ、碩果ノ學風ヲ奉承セリ、其經ヲ説クニハ、一ニ朱子ノ傳註ニ從ヒテ、別ニ一家言ヲ立テズ、門生中略朱註ニ通ジタル者ニハ、雕題其他朱説ト抵觸セザル諸家ノ説ヲ讀ムコトヲ許セリ、但シ其祖並河天民ノ四端説、性情心解ノ如キハ、千古不磨ノ言トシテ、其尤得意トスル所ナリシ故、孟子ノ講義ニハ必斯等ノ説ヲ引キテ、天民ガ四端ハ更々日常言行ノ間ニ發スト云フ説ヲ訓示シ、常ニ雙手ヲ交指シテ、其狀ヲ形容シタリ、門下生ノ學科ニハ、經書歷史均シク修ムルコトヲ命ジ、其他ニ制限アラザリシガ、唯諸子、殊ニ韓非子ノ如キヲ讀ムコトヲ喜バザリキ、博約ノ訓ハ實學ヲ窮メ、實行ヲ修ムルニアルヲ以テ、徒ラニ文技ニ騖セテ、德行ニ疎ナル者、世外ニ優游シテ、自高シトスル者ノ如キハ、其取ラザル所ナリ、前者ニ對シテハ、賴山陽ヲ始トシテ、近世輕薄ノ文士、素行修マラサル儒流ノ如キハ、皆一言ノ下ニ訶斥セリ、賴山陽ハ其尤喜バザル所ニシテ、門生ニ日本外史、日本政記等ノ書ヲ讀ムコトヲ禁ジタリ、常ニ言フ、山陽ノ名ヲ得タルハ、其學問才能ノ人ニ卓絶シタルガ爲ニアラズ、畢竟其子三樹三郎ガ慷慨憂國ノ士ナルガ故ノミ、孟子ニ所謂、聲聞過于情者、君子恥之、トハ其實ナクシテ虚名ヲ博スルコト、山陽ノ如キヲ云フナリト、後者ニ至リテハ、予嘗テ侍坐セル時、語竹林七賢ノ事ニ及ビシニ、寒泉翁ハ彼ラハ生ヲ貪ル無益ノ輩ナリト罵倒セリ、

寒泉時代ノ懐徳堂ニテハ、經書ノ講義ハ朱註一方ノ單純ナル解釋ニ過ギズ、輪講其他書生方ノ研究ニモ、諸家ヲ交ヘ擧ゲテ、議論ヲ闘ハスコトヲ許サレズ、謹愼默從シテ、教ヲ承クルヲ常トセリ、故ニ游學ノ書生、其教養ニ滿足セズ、競ヒテ藤澤東畯ノ門ニ集マル形勢ト爲リタリ、

○府城講書ノコト

寒泉モ亦前例ニヨリテ城入ヲ命ゼラレ、城代ノ爲ニ經ヲ講ジ、又兩衙尹ノ講筵ニモ臨ミ、久須美佐渡守ニハ最寵願ヲ

受ケタリ、嘗テ衙尹某ノ前ニ論語ヲ講ゼシニ、衙尹茵ヲ用井タレバ、寒泉之ヲ咎メテ、吾ガ講ズル所ハ是レ吾ガ言ニアラズシテ、聖人ノ大訓ナレバ、宜シク禮ヲ守ラルベシトテ、之ヲ去ラシメタリ、

○寒泉ノ詞章

寒泉ノ文章ハ結構精健、用語圖熟ニシテ、一字苟セザルコト、碩果ノ風格ヲ承ケタリ、然レドモ平生作ル所甚多カラズ、寒泉文ニ於テ蘇東坡ニ矜式ス、嘗テ竹山ガ文ヲ授クル法ヲ述ベテ、唐宋諸大家中其好ム所ニ效フベキヲ教ヘテ曰ク、予ハ大蘇ヲ取レリト、

詩ハ其嗜ム所ニシテ、時ニ隨ヒテ之ヲ出ス、格律豪宕ニシテ爽儁ナリ、毎年歳晩ト新年トニハ、必七律ヲ賦スルコト、定ム、共ニ起句ニ自己ノ年齢ヲ紀ス、即歳晩ニハ、何十何年今且暮、或ハ何十年華今且暮ヲ以テ起シテ、以下ノ諸句ニハ、内外上下ノ人事ヲ録シテ、周年ノ詩史ト爲シ、新年ニハ、何十何年今且至、又ハ何十年華今且至ヲ起句トシテ、新年ノ風物ヲ咏ジ、并ニ以後一年間ヲ祝スル意ヲ叙スルヲ例トセリ、碩果ガ丙申除夕ノ詩ニ、六十六年年已盡ト云フヲ起句トシタルガアレバ、或ハソレ等ヨリ創意セシ者ナランカ、今寒泉ノ詩一二ヲ録ス、

壬寅暮春、鑒官村上使君官邸講後、令賦城中老松、賜韵城字、席上恭賦

老幹森々拂天聳、儼然左纛翠陰情、元和塵斂升平日、十八公榮浪速城

○

封建治移爲郡縣、諸侯致國諸臣餞、寄語藩士問業者、平生丹心唯一片、

右二首自草、早野氏屏風張交ノ中ニアリ、

烹金化砲備强禦、一擊依然聽廟鐘、十萬億程聲若徹、西夷掩耳訝迦農、

右ハ何カニ出テタルヲ寫シオキタリ、家ニハ予ニ與ヘラレタル數首ノ外獲ル所ナシ、

○寒泉ノ和歌

寒泉又和歌ヲ好ム、日本人ト生レテ和歌ヲ讀マザルハ恥ナリトテ、常ニ我等ニ作歌ヲ勸メタリ、殊ニ老年ニ及ビテハ、日常口ヲ衝キテ句ヲ成ス、別ニ歌集トテモナケレドモ、想フニ其數詩ヨリモ多カルベシ、今家藏ノ短冊ヨリ其一二ヲ寫出ス、

この年の上巳は翁が七十三の喜なればよめる
翁も巳の年なめり　華の翁
このとしの彌生のみの日老るみも七十みつわくまん盃

木村翁より悠紀とのの松の餘材の報とてむら雨てふ甘もの耳　尊詠を添て給ひける返しとて
老松のことのはかよの音たかきむら雨さそふすまのなみかは

庚申のとし七月八日に貞正君の小祥忌に
去年のけふことしの秋に返りきてなほも驚く萩の上風

和歌ニハ華の翁　又平　登茂樹ト書セリ　登茂樹は朋來ナリ

○懐徳堂ノ詩文會

寒泉時代ノ懐徳堂ニハ、詩文會毎月各一回アリ、何レモ社友門下生ノミニテ、竹山時代ノ如ク世上ノ儒家文人ト詩酒徵逐スルガ如キコトハ絶エテナカリキ、文會ハ常ニ寒泉ノ鑒裁スル所ニシテ、席上茶菓ヲ用井、詩會ハ桐園常に會事ニ幹タルヲ以テ、酒肴ヲ出スヲ例トセリ、例會ノ外ニハ毎年園中ノ海棠　即櫻花、懐徳堂ニテハ竹山ノ説ニ本ツキテ櫻ノ字ヲ用井ズ
滿開ノ時ニハ、詩會ヲ催シ、庠園海棠ヲ以テ題ト爲シ、梨花ノ時ニハ庠園梨花ヲ以テ題ト爲シタリ、懐徳堂ノ園庭即

己有園ニハ、海棠（楊貴妃櫻）ト梨トノ大木アリ、海棠ノ盛ニハ、對面ノ商家モ店頭ヲ開キテ、花見ノ宴ヲ催シタリ、予ガ幼時、海棠ハ大風ノ爲ニ折ラレタリシガ、梨ハ廢校後マデモ存シタリ、又夏時月夜ニハ臨時ニ詩會ヲ催スコトモアリタリ、

○歷代山陵ノ蹈査

寒泉ハ大和其他近畿ニ散在スル歷代山陵ノ隱晦シテ、往々荒廢榛蕪スルモノアルヲ慨シテ、何年ノ頃ヨリナリシカ、山陵調査ノ事ヲ思ヒ立チ、同志門生等ヲ率井テ、畿内ノ諸陵ヲ蹈査シ、悉ク之ヲ圖シテ、其窮探セシ所ヲ附記セリ、圖并ニ附記ハ並河氏ニアリ、

○魯艦入港ニ付應接史官ヲ命ゼラレシコト

嘉永中、魯西亞ノ軍艦ガ天保山沖ニ突入セシ時、寒泉ハ先考桐園ト共ニ應接史官ヲ命ゼラレ、一時懷德堂ノ授業ヲ休ミテ日々出張シ、應接ノ事アル時ハ、軍艦ニ舟ヲ進メ、漢文ヲ以テ應接セシガ、事罷ミテ、官ヨリ白銀七錠ヲ賜ヒテ、其功ヲ賞セラレタリ、是ニ於テ寒泉漢文ヲ以テ其顚末ヲ録シテ、拜恩志喜ト題シタリ、右ノ白銀七錠ノ目録ハ臺ノマヽニ存留シ、年毎ニ一回之ヲ出シテ當時ヲ記念シタリ、

○寒泉ノ著書

寒泉ノ著書ニ辨怪一巻アリ、蓋寒泉妖怪變化ヲ信セズ、世上怪談ニ迷ハサルヽ者ノ惑ヲ解カント欲シテ、凡ソ世上ニ傳ハル所ノ妖怪變化幽靈狐憑等ノ事跡ヲ擧ゲテ、一々辨解シテ、復疑念ヲ挿ム餘地ナカラシメタリ、巻尾ニハ奥野小山ト妖怪ニ付キテ論ゼシ諸ヲ載セタリ、著書ノ目ハ左ノ如シ、

辨怪一巻
拜恩志喜一冊
干支稿

右ハ年々干支ヲ逐ヒテ集録セシ詩文稿ナリ、冊數今詳ナラズ、

文通　巻數不詳

寒泉ノ編次修緝セシ者ハ左ノ如シ、

奠陰集

壎集

篪集

幽人先生反故録

天潢餘滴　天皇ノ宸翰ナドヲ集メタル者

文奎餘光　名家ノ手簡ヲ集メタル者

慷慨集　或ハ憂國志士慷慨集ト題シタルヤウニモ覺ユ確ニハ記憶セズ、維新志士ノ詩歌ヲ集メタル者ナリ

疊字集

居諸録　寒泉ノ日記（漢文）

何年頃ヨリ筆ヲ起コシシカ詳ナラズ、死ニ至ルマテ一日モ怠リシコトナシ、病氣等ニテ記録スルヲ行ザル時ハ、娘閨菊ニ口授シテ筆記セシメタリ、用紙ハ束脩月謝ノ包紙ヲ裏ガヘシニシテ位綴ニ爲シ、毎年二冊、正月七月ニ巻ヲ改ム、居諸録トハ、詩邶風ノ日居月諸照臨下土ノ句ニ取リタリ、

○寒泉ガ赤穂義士ニ對スル追念

寒泉ハ平生深ク元禄四十七士ノ忠烈ヲ追慕シ、座右ノ書篋ニハ、義人録ヲ始メ、其他ノ實録ヲ滿載シ、時ニ隨ヒテ愛讀シ、又大石良雄ノ呼子笛、龕燈、手燭、小刀、大高忠雄ノ木刀杯、義士遺物ノ模造品ヲ藏スルコト多ク、良雄ノ君子喩於義ノ一行物、又一力樓ノ天井ニ書シタリト云フ逗留不遇二夜者也ノ刻板ヲ藏シ、希望者ニハ其拓本ヲ頒與セリ、講堂ニ出ヅル時ハ、必右ノ大高忠雄ガ木刀、人斬れば己も死なねばなりませんト題シタル者ノ模造品ヲ佩ブルヲ常トセリ、

○寒泉ノ志操

寒泉慷慨義烈ノ氣象アリ、義氣和魂ハ平生口ニ絶タズ、其詠ズル所ノ和歌ニ曰ク、

兼ねてしも誓ける一筋をふみな違そ大和たましひ
かしら打うちかへすてに泣をやむおさな心も大和魂
幼子の早く仇しる心根は吾日本に生ひ出るたね
吾國の大和魂もろこしの我の一文字とかねてしるへし

幕末勤王攘夷ノ論ノ天下ニ喧傳セラレシ頃ハ、志士活躍ノ報ニ接スル毎ニ、意氣軒昂、感奮措ク能ハザル狀アリ、當時志士ノ詩歌ハ、聞クニ隨ヒテ纂セリ、慷慨集是ナリ、其外人ヲ嫌忌スルコト蛇蝎ノ如ク、斷髪洋服ハ言フニ及バズ、凡百ノ器物食品等、西洋ノ臭味アル者ハ、峻拒シテ容レズ、洋裝シテ謁ヲ請フ者ハ面會ヲ謝絶セリ、平生人ト語ル時ハ、大聲ヲ以テ洋夷ヲ罵倒スルヲ一快事ト爲シタリ、詩アリ、以テ其志氣ヲ窺フベシ、

聖道蓁蕪茅塞天、如崩厥角萬人顚、後凋誰是峯松栢、霜雪林中獨卓然、

○寒泉ガ時世ニ對スル感想

寒泉嘗テ予ニ語リテ、徳川幕府ノ衰滅ニ歸シタルハ自ラ招致セシ所ナリト言ヒシコトアレバ、時世ノ推移セシハ已ムヲ得ザル運命ナリト思ヒ居タルニ相違ナカルベシト雖、明治政府ノ、舊例ヲ破壞シテ、一ニ西洋ニ模倣スルガ如キ方針ヲ取リタルヲ喜バズシテ、百事百物、悉ク其舊思想ト相容レズ、故ニ新政府ノ爲ス所ハ、何事ニ拘ラズ、「ラッチモ無キ事ヲスル」ト云ヒテ、冷眼輕侮スルヲ常トセリ、外見ニハ明治ノ正朔ヲ奉ズルコト丈ガ不思議ニ思ハル、感アリキ、予嘗テ此ノ事ニ言及シタルニ、寒泉答ヘテ、年號バカリハ歳月ノ表識ト爲ルベキ者故、將來ニ於テ錯誤ヲ生ズル恐アレバ、用井ザルヲ得ズ、ト言ヘリ、サレバ政府ニ反抗スル者アルヲ聞クトキハ得意ノ狀アリ、十年戰役ノ時ノ

如キハ、老西郷ノ壯擧ヲ喜ビテ、其捷報ヲ聞クヲ樂ト爲セリ、

○寒泉ノ風貌

寒泉ハ清癯堅實ニシテ、身度普通ナリ、頭部ハ稍小ナル方ニシテ、秀眉彎曲垂下シテ、長壽ノ相ヲ具フ、晩年髪落チテ、後頭部ニ數莖ヲ存スルノミナリシガ、敢テ剪リ去ルコトヲ爲サズ、又放散スルヲ好マズ、女閏菊ヲシテ寸許ノ小髷ヲ結バシメ、志氣舊ニ仍リテ時流ヲ逐ハザルヲ示セリ、寒泉畫像ヲ作ルコトヲ好マズ、無論寫眞ヲ取ル筈モナケレバ、眞影ノ存スルモノナシ、

○寒泉ノ性格

寒泉ノ性格ハ、端嚴ニシテ亦寛裕ナリ、政治上ニモ教育上ニモ、寛嚴宜シキヲ得ザレバ人ヲ御シ難シトハ、其持論トスル所ナレバ、其資質モ亦自ラ然ル所アリキ、

○寒泉ノ講釋ブリ

寒泉音吐洪亮ニシテ、口辯明快ナリ、懐徳堂ノ講會ニハ、聲一町以外ニ達シタリ、其最得意トスル所ハ逸史ノ講義ナリキ、

○寒泉ノ嗜好

寒泉謠曲ヲ好ミ、亦狂言ヲ愛ス、晩年無聊ノ際ニハ狂言ノ書ヲ繙キ、家人ニモ讀ミ聞カスルコトヲ樂トシタリ、

寒泉酒ヲ嗜マズ、尤茶ヲ愛ス、煎茶ハ常ニ茶具ヲ座右ニ備ヘテ、其時ヲ限ラズ、末茶ハ毎日午後一睡ノ後、女閏菊ニ點ゼシムルヲ例トセリ、

○寒泉ノ衛生

寒泉ハ少時肺患ニ罹リタルコトアリシニモ拘ラズ、善ク壽ヲ保チテ八十有三ニ至レリ、是レ平生飲酒セズ、過食セズシテ、攝養極メテ嚴ナリシニ由ルナリ、

○寒泉ノ書法

寒泉ノ書ハ遒勁雄拔、之ヲ竹山ニ得タリ、把筆ハ單鈎ニシテ、筆ハ用節ヲ好ミ、又竹筆ヲ愛用セリ、羊毫ノ如キハ一切之ヲ執ラズ、紙ハ熟硾ヲ用井タリ、熟硾ハ墨汁ヲ吸収セズ、瀦留シテ乾クコト遲シ、故ニ大幅ニ向ヒテ筆ヲ下ス時ハ、立チナガラ、或ハ側面ヨリ之ヲ書シタリ、筆勢ノ餘力、往々掠磔ニ端ニ迸リテ小點ヲ爲ス、諸生間稱シテ風鈴附ノ體ト曰ヘリ、亦草隷二體ヲ善クセリ、楷書ハ顔法ナリ、

○寒泉ノ交友

寒泉ノ時代ニモ、懐徳堂ハ尚碩果ノ遺風ヲ承ケテ、閉鎖ノ姿ヲ持續シタル故、其交游スル所モ亦重ニ同社舊交ノ者ナリシガ、其他ニ於テハ、仙臺藩ノ清水中洲、津山藩ノ儒員中西半仙、伏見ノ羽倉可停等二三人ノ人ト、尤親交アリキ、中洲ガ刻通語序ハ、屢校ヲ易ヘテ、寒泉ニ嚴密ナル評定ヲ請ヒタリ、

○寒泉門人

寒泉ノ門弟中學才優秀ナル者ヲ擧グレバ山村禹之助　藤戸寛齋（今木積一路）共ニ助教ヲ務ム　岡本隆吉（後和ト改ム）年梅寛之等ニテモアルベシサレド學問ヲ以テ一家ヲ成シタルホドノ者ハアラズ

○懐徳堂遺風ノ擁護

寒泉ガ懐徳堂先哲ニ對スル熱誠ハ頗深切ナル者ニテ、吾ガ先考桐園ガ和泉町ノ中井ヨリ來リテ、宗家ヲ繼グコト、ナリシ故、兩者ニ對スル權衡ヲ失ハンコトヲ恐レテ、常ニ教戒スル所アリ、嘗テ予ガ界浦ニ之クヲ餞シタル擬風、茅渟

ノ第四五章ニ左ノ訓辭アリ、

奠陰水哉、學德一源、懷德堂學、花萼同根、爾父水哉、繼宗奠陰、擔當兩賢、爾勿一偏、爲博爲約、鄒魯管鑰、懷德堂規、以爲學的、鑄鎔斡旋、維汝才幹、斆學之半、勉哉菟孫、

○

示菟孫

懷德諸堂先哲恩、學規勿忘幾來孫、存心聖訓同而異、敢趁遷新變舊痕、

八十一外祖樺翁

寒泉又予ヲ戒メテ曰ク、竹山履軒二先生ノ事ニ付キテハ、世人往々其長短ヲ擧ゲテ、兎角ノ批評ヲ下セドモ、子孫タル者ハ愼ミテ兩者ヲ臧否スベカラズト、

○懷德堂廢絶當時ノ寒泉

懷德堂ノ廢絶ハ、寒泉ノ憤慨痛惜シテ已ム能ハザル所ニテハアリタレドモ、頽勢ノ支持スベカラザル、亦如何トモスベキナケレバ、明治二年冬十二月、中井一家ト共ニ、校門ヲ閉シテ、城北本庄村ニ遷リシガ、校ヲ出ヅル時、詩歌各一首ヲ門扉ニ貼付シテ去レリ、左ノ如シ、

堂構于今百卌年、皐比狗續尚綿々、豈圖王化崇文世、席捲講帷村舍遷、

百餘リ四十四年のふみの宿けふをかきりと見かへりていつ

後何人カ之ヲ取リ去リタリト云フ、

○懐徳堂閉鎖後ノ寒泉

懐徳堂閉鎖ノ際、中井一家ト共ニ本庄村ニ移リシ後ハ、従前ノ門生モ追々來集シタレバ、尚懐徳堂ノ額ヲ掲ゲテ、桐園ト共ニ教授ヲ繼續セシガ、固リ衰殘ノ微喘ニシテ、前途回復ノ希望モナケレバ、翌三年三月ヨリ南江戸堀ナル其女婿淡輪參郎ノ控家ニ移ルコトヽナリ、淡輪氏保護ノ下ニアリテ、従游ノ子弟ニ教授セリ、之ヲ燕渠學舍ト稱ス、六年三月廿五日ヨリ中ノ島常安橋北詰ナル舊柳河藩邸ノ淡輪家ニ引キ取ラレテ同居シ、七年十一月、淡輪氏ト偕ニ櫻宮ニ居ヲトシ、帷ヲ下シテ教授セシガ、十一年一月廿一日、復江戸堀ノ舊居ニ還リテ、世ヲ終フルニ至レリ、寒泉歿シテ後、女閨菊ハ尚淡輪氏ト同居シ、岡本和ノ紹介ニテ造幣局ノ女學校ニ職ヲ奉ゼシコトモアリシガ、卒シテ後、並河総次郎ノ女ヲ相續者ト爲シタレドモ、尚幼ナリシ故、一タビ家ヲ閉ヂテ、遺物ヲ宗家ニ保管スルコトヽナリタリ、

○寒濤樓

懐徳堂ニ於テハ、教授職、常ニ樓上ニ居住スルヲ例トシタレバ、寒泉翁燕居ノ室モ亦樓上ニアリ、元懐徳堂ノ樓ハ之ヲ廓然樓ト稱シ、萬年書廓然二大字ノ扁額モアリシガ、寒泉時代ニハ其稱ヲ用井ズシテ、其父巨川ノ寒濤樓ノ名稱ヲ繼ギ、南軒ニ文衡山集字ノ寒濤二字ノ刻額ヲ掲ゲタリ、廢校後ハ、其居ル所ヲ寒濤廬ト稱ヘタリ、

○寒泉ノ墓石

寒泉ノ墓石ハ、題シテ樺翁並河先生之墓ト曰フ、羽倉可亭ノ書ナリ、二人在世ノ時、嘗テ相約シテ曰ク、後ニ存スル者ハ先ニ死セシ者ノ墓ニ題スベシト、寒泉先ダチテ歿セリ、故ニ可亭約ノ如ク之ヲ書セリ、

○寒泉ノ男蜑街

蜑街小字ヲ阿(ママ)二郎ト曰ヒ、冠シテ秀次郎ト改ム、諱ハ尚一、字ハ黙甫、蜑街ト號セシハ、尼ヶ崎町ニ生レシヲ以テナリ、蜑街ハ寒泉ノ第二子ナリ、寒泉二男七女アリ、長男育セズ、故ニ之ヲ鍾愛セシコト、竹山ノ蕉園ニ於ケルガ如シ、蜑街明敏ニシテ學ヲ好ミ、幼ヨリ善ク文ヲ屬ス、已ニ長ジテ學寮ニ在リ、在塾ノ諸生ト案ヲ列子テ書ヲ讀ム、終日端

坐シテ欹側スルコトナク、専念學ニ耽リテ、嘗テ笑語スルヲ聞カズ、慶應四年七月十九日病ミテ卒ス、年甫メテ二十、名ヲ易ヘテ孝顕ト曰ク、文詩ノ遺稿篋ニ滿チテ、未収集セズ、吾ガ家其長篇一幅ヲ藏ス、此レ其絶筆ナルベシ、書モ亦父寒泉ノ風格ヲ備フ、蜑街八日々講堂ニ躋リテ、助教ヲ務メタリ、

咏虞美人艸、追賽曾子固韻

紅抹流霞白綴雪、溥露會來淚和血、虞兮虞兮奈若何、朝開妖豔暮霣滅、托春覇種後花王、請看強楚一朝亡、鐘愛雖不如前盛、嬌態終不改舊粧、其奈細腰易摧倒、野逕常追夏候老、英雄心事歔掩難、英魂尚茲依芳艸、九腸化爲幾多枝、新翠皺如嚬蛾眉、狂風驚訝楚歌起、應懷當年騅蹶時、舊粧雖新墳稍古、魂飛烏江原上土、鴻門劍舞堪遺憾、花影婆娑月前舞、

蜑街□□

懐徳堂水哉館先哲遺事巻七

桐園遺事

○名號

桐園小字ヲ鮒太郎ト曰フ、碩果ガ柚園ニ代リテ作リタル臍帯記アリ、左ノ如シ、

中井鮒太郎臍帯記

文政癸未九月望、柚園主人始生男子、越六日、既翦髪、家人請名、主人欣然撫其首曰、先子嘗言、胡瓜之始成、人貴之、以充珍羞、其價甚貴、漸長漸賤、及老且熟、呼爲赤瓜、唾而不顧、鰌魚之子曰鮒、夏秋之交、隨長味甘美、莫不貴焉、至季冬、老而益美、呼曰寒鰌、其賞尤深矣、世之以才子神童稱、所謂小而了々、大未必奇者、是胡瓜少時之賞

耳、非鮒之老而益美、不足貴也、遂名之曰鮒太郎、鮒乎鮒乎、我冀女爲寒鰥矣、已ニ冠シテ修二（又修治ニ作ル）ト稱ス、諱及泉、字公混、居ヲ本庄村ニ移スニ及ビ、北郭野人ト號ス、晩年ハ又汲所ト號ス、

○桐園ノ宗家相續

桐園ハ履軒ノ孫ニシテ柚園ノ子ナリ、母ハ岸田氏、名ハ栢（カヘ）、他ニ男子ナケレバ和泉町中井ノ後ヲ承クベカリシナレドモ、今橋ノ中井ニハ碩果一男夭折シテ繼嗣ナク、一時並河寒泉ヲ養子ト定メタレドモ、幾クモナクシテ舊姓ニ復シタレバ、天保三年正月桐園十歳ノ時ヲ泉坊ヨリ貰ヒ受ケテ繼嗣ト爲シ、柚園ノ歿後ニハ和泉町中井ヲ以テ宗家ニ合祀スルコトヽナレリ、

鮒太郎宗家家督證文二通

右懐徳堂記録拾遺ニ載ス

○桐園ノ管校職

天保十一年三月二十四日、碩果死去ノ後、桐園十八歳ニシテ學校預リト爲リテ、明治二年廢校ノ時ニ至レリ、

○桐園ノ風貌

桐園ハ身度長大ナラズト雖、骨節強健、筋肉堅實ニシテ、履軒ノ體格ヲ具フ、家ニ寫眞アリ、平生ト相似ザル所アレドモ、亦其風貌ヲ髣髴スルニ足ルナリ、

○桐園ノ性格

桐園資性温厚ニシテ圭角ナク、善ク人ト交ル、唯門下生及ビ子女ニ對シテハ、嚴格ニシテ假借スルコトナシ、我ガ幼

時、常ニ父ノ前ニ讀書ヲ授ケラルルコトヲ畏レ、好ミテ外祖寒泉ニ就キタリ、寒泉ハ兒孫ニ對シテ温容アリキ、

○懐徳堂ノ授業

懐徳堂授業ノ狀ハ、午前ニハ、寒泉講堂ノ北偏、西夾ノ前ニ座ヲ定メテ、講義ヲ爲シ、或ハ質問ヲ聽キ、桐園ハ南偏中央ノ柱下ニ坐シテ、素讀ヲ授ク、寒泉ノ前ニ當リタル北偏ノ中央ニ助教ノ座アリ、午後ニハ寒泉西夾ニ在リテ、桐園ハ講堂ノ南房ナル鞘ノ間ノ西偏ニ移リテ、各質問ヲ聽クヲ例トセリ、

○桐園ノ書齋

桐園ノ書齋ハ講堂ノ北方、中霤一室ヲ隔テタル處ニアリ、稱シテ文質ト曰フ、想フニ萬年ガ文質二大字ノ掛軸アリタレバ、竹山ノ頃ニハ此ノ質ノ楣上ニ扁セシコトニテモアリテ、斯ク稱フルニヤ、或ハ文室カ、今詳ニ知ルヲ得ズ、桐園ノ時ニハ、南ニ蕉園ガ稽古ノ額、北ニ竹山ガ毋不敬ノ額ヲ掲ゲタリ、

○桐園ノ愛讀書

桐園家學ヲ寒泉ニ承ケタリ、自ラ經説ヲ立ツル者ナシ、平生左傳ヲ讀ムニ尤林註ヲ愛讀セリ、

○桐園ノ詞章

桐園ハ懐徳堂ノ末路多事ノ時ニ管校職ヲ承ケタリ、故ニ平生多クハ俗務ニ鞅掌シテ、詩文ヲ樂シム閑ヲ得ズ、其篇什極メテ少シ、今乃存スル者僅カニ數篇アルノミ、其一二

哭文厚清水君

翁耶如父亦如師、庠事斡旋芳意滋、冥境勿憂無好友、群賢香案與君期、

送伯峰清水君之仙臺

匹馬嘶風征袖飜、岐蕪棧道指東藩、不如歸去牽衣恨、呉海離憂托蜀魂、
餘寒月
一片氷輝寒色明、春風二月夜三更、半窓料峭還休厭、模取梅花疎影清、

○桐園ノ書

桐園字ヲ作ルヲ好ム、校務蝟集ノ間ニ在リテモ、曾テ習字ヲ廢セズ、智永四體千字文、草書韻會、草書淵海ヲ臨セシコトアルヲ知レリ、行書ハ履軒ヨリ得タリ、

○桐園射ヲ好ム

桐園平生射術ヲ好ミ、舊幕吏宮寺某氏ニ學ビテ練習倦ムコトナシ、講堂ノ椽側ニ巻藁ヲ設ケテ、毎日晩餐後ニ射ヲ習ヒ、休日ナドニハ堂背ノ狹長ナル間地ニ堘ヲ設ケテ發射スルコト、爲セリ、桐園藏書中ニ、日置假名目録、武經射學正宗等アリタリ、

○懷德堂ノ書庫

碩果ノ時代ニハ、盛ニ和漢ノ圖籍ヲ収集シタレドモ、未書庫ヲ設クルニ及バザリシガ、桐園ニ至リテ舊土藏ノ隣地ニ書庫一基ヲ建設セリ、

○懷德堂掉尾ノ事業

桐園懷德堂ノ規模ヲ恢弘シ、先業ヲ隆興セント欲シテ、汎ク同志ヲ謀リ、其屋敷地ヲ廣メテ東心齋橋筋ニ至リ、竹山ノ寛政再建ノ時ニハ、聖廟ノ建設ヲモ圖畫シテ成ラザリシガ、此ヲモ建造シテ、先志ヲ繼ガント欲シ、圖面已ニ成リ、協議モ隨分進行シタル由ニ聞キ及ビタルニ、幾クモナクシテ海内擾亂、國政推移スルニ及ビタレバ、遂ニ畫餅ニ歸ス

ルコト、ナリタリ、當時將軍家茂在府ノ便宜ヲ以テ、出願ノ手續ニ及ビタル者ナルベシト思ヘド、或ハ亦同志中他ニ建晝スル所アリシ者カ、將何ノ動機アリテ此ノ議ヲ發スルニ至リカ、記録存セズシテ詳ニスルヲ得ズ、尤右繪圖（或ハ記録モアリシナルベシ）ハ桐園歿後、懐徳堂舊藏ノ十干書笥中ノ丙函ニ在リシガ、予ノ不在中、右ノ内六個ヲ騙取セラレシコトアリシニ因リ、今家ニ存セズ、

○嘉永中ノ事變

嘉永七年九月十八日、魯西亞ノ軍艦ノ天保山沖ニ突入シテ阪府騒擾シ、警備頗嚴ナリシ時、桐園教授寒泉卜官命ヲ奉ジテ、文筆應接ノ職ニ當リシガ、事罷ミテ白銀五枚ヲ賜ハリタリ、寒泉ノ拜恩志喜ニ詳ナリ、

○書院外ノ公務

文久中將軍家茂在府ノ時、命ヲ奉ジテ阪城ノ儒員ト爲リタリ、

○逸史ノ上梓

逸史ハ從來寫本ヲ以テ行ハレ、門下來游ノ士、皆一々手寫シタレドモ、要求者益多クシテ、不便少カラザルヲ以テ、桐園ハ寒泉ト謀リテ上梓スルコト、ナリ、雕刻印行ノ諸件ハ專ラ書林加賀屋善藏、河内屋吉兵衛ニ擔當セシメタリ、板下ハ明朝風ヲ善クスル者ヲ擇ビ、稿本ノ校讎ハ寒泉其勞ニ任ジタリシガ、幾次カ校ヲ易ヘシメテ、用意頗周到ナリシカドモ、魯魚ノ誤續出シテ、其困難一通リナラザリシ由、寒泉ノ談話ニ聞キ居タリ、逸史ノ扉ハ初書家三平ニ屬シテ書セシメタレドモ、懐徳堂風ナラ子バ、卑俗ニシテ意ニ充タザル所アリシ故、刻已ニ成リタルニ拘ラズ、之ヲ廢シテ竹山原本ノ自筆ヨリ雙鈎ヲ取リテ改刻スルコト、ナリタリ、三平ノ刻字ハ尚家ニ存セリ、

逸史ノ出版ノ頃坊間出板ノ印刷物ニ寒泉翁ヲ評シテ「逸史が板になるさうぢゃお手柄〳〵」ナドアルヲ一見シタルコトアリ、

○書林ヨリ納メタル一札

一　御藏板逸史彫刻御企之砌　私共兩人乍不及愚配仕候ニ付　此度板賃擦兩人へ引請被仰付千萬難有仕合　依之逸史壹部ニ付板賃銀拾五匁ニ御定摺立部數之儀者精々出精仕平均間ニ弐拾部宛摺立候　板賃銀上納之儀ハ節季毎々相納可申候　然上者發行廣相成候ニ付而者書林仲間表作御通取ニ付御支配致候　規模ヲ以板賃様之儀ハ兩人限ニ願上候所御承知被成下候段難有奉存候爲後日一札依而如件

但し此度仲間入用并に株式譯立入用共逸史廿部之板賃を以取扱仕候事

安政五戊午八月　　加賀屋善藏○
　　河内屋吉兵衛○
中井様

○逸史獻上ノ事

逸史寫本ハ竹山在世中將軍家ニ獻上セシガ、上梓印行ニ付キテハ文久三年五月九日西奉行所ヨリ修二ヲ召シテ當時在城ノ將軍家ヨリノ内意ヲ傳ヘ、出板ノ逸史壹部獻上致スベキ旨申渡サレタレバ、並河復一中井修二兩名ヲ以テ獻上ノ手續ニ及ビタルニ、其御褒美トシテ白銀七枚ヲ下賜セラレタリ、

追而獻ジ殘ノ逸史ヲ城代、町奉行、玉造京橋兩御定番等へモ進呈シタルニ、夫々挨拶アリテ、菓子料五百疋ツヽ位ヲ贈ラレタリ、

事畢リテ後、同志中ニ通知シタル書狀、

尚以獻上之名前ハ復一修治連名ニ而可指出と被仰渡候段　別而難有候

向暑之節御座候處　各様愈御佳勝被來御座珍重奉賀候　然者去ル九日七ツ時　從西御奉行所修治急召ニ而　當時御在城も給有候　從公方様藏板逸史壹部獻上可仕様とも御付候趣被仰渡不存寄難有仕合　殊ニ此度ハ獻上物一切御所と被仰出候處　猶更不一方難有奉存候　右逸史之義ハ寛政末年寫本獻上仕置　猶又此度再ひ獻上仕候抔先代ハ不及申　永々當學校之

規模と一同感銘仕候　此段御吹聴申上度如此御座候　以上

五月十一日

中井修治
並河復一

古林正倫様
淡輪三郎様
平瀬市郎兵衛様
笹服正元様
高池三郎兵衛様
うつ本舊掛方壹丁目北隅天満屋
水野善九郎様
淡路町淀屋橋筋東へ入北隅泉屋
井坂禮太郎様
渡邊丹後守様
御■同心
市村住之助様

乍御面倒御順達頼入候

清水彌三郎様
山片平右衛門様
森三壽様
加藤喜太郎様
赤松新介様
上人町魚ノ棚東入南側
岡本隆吉様
嶋好節様
忍屋處
中村辰八郎様

堀用庵様
平瀬宗十郎様
黒田源右衛門様
白山彦五郎様
赤松孫太郎様
岡本要治様
小川節斎様
友古町追分少し北へ入東側
浅岡右橘郎様

○脇坂家借書事件

龍野侯脇坂淡路守心ヲ文學ニ潜メ、懐徳堂諸先哲ヲ景仰セラルヽコト淺カラズ、藩ノ侍醫タル中井常菴ヨリ書院ニ藏

スル所ノ竹山履軒ノ遺書ノ事ヲ聞キ、常菴ヲ介シテ借覽ヲ求メタレバ、奠陰集、詩律兆、四茅議、七經雕題、小學雕題等ヲ出シテ覽ニ供セシニ、弘化二年三月廿九日其謝禮トシテ更紗壹反、鹽雉子壹羽ヲ賜ハリ、留守居平部專左衞門ヲ以テ傳達セラレタレバ、四月朔日文惠文清兩家君ニ獻奠シテ其靈ニ奉告シタリ、其文左ノ如シ、但シ並河寒泉ノ代作ナリ、

維弘化二年四月朔　不肖孫及泉薰盥百拜、謹奠

龍野矦藤公所賜花布一段疏視一羽、告　皇祖考文惠文清兩夫子之靈、及泉仄聞、龍野見矦自潛邸日、篤向學、尤歸嚮心于　兩夫子、以囊者吾同祖常菴氏　忝侍醫之命也、屢在公左右、示譚常騰口於　兩夫子、延及其著書、乃託常菴氏、傳乞假辟命、始焉而奠陰集、中焉而詩律兆、終焉而茅議、茅議之命至日、唯録郵刑均田二篇耳、及泉弱冠、未更事、庠中之事、事無大小、一咨決於並教授、以行、乃謀之、則曰四茅議之未遍布於世、公安知之、宜整篇次以奉致焉、乃從之、他日常菴氏有書、云、公頃命賤臣某曰、孤每乞中家伯叔遺書、送致未嘗曠日、無恢嗇之意、我太嘉焉、欲報與以答其意、汝其傳之乎、某喜惧交至、以爲優命之謀及賤臣、不任屏營之至、然思而不言、非忠也、乃曰、今日之賜、傳自賤臣、則私賜耳、傳自外廷、則公賜矣、恩榮之隱見、果如何哉、敢布腹心、乃賜納受、不日應有坂邸處守傳命、薰沐以俟、以昨廿九日、果傳命賜之也、及泉不勝感銘、即日如邸拜賜、嗚呼　及泉乳臭承乏管校、校中所藏　兩夫子遺著、累々成丘、日夕重護、不啻頻年、雖有秋陽展晒之事也、猶不免蠹害鼠傷、幸　忝此需命、屢開厨戸少忘蠹害、夫滿紙之言、雖出於　兩夫子之學之富贍、猶此草茅之危言耳、今也一垂　公侯之覽、則安知不異日政迹乎、　兩夫子、其將舉眉於九原矣、何榮如之、況今日之厚賜乎、況常菴氏之念祖以竭力乎、抑優賜之照弊屋、　兩夫子學力之所致、固不俟言、常菴氏之力爲之媒也與、及泉豈敢當之哉、及泉豈敢當之哉、敢告尚饗、

弘化甲辰四月之吉　　不肖孫中井及泉百拜謹告

弘化元年十二月、脇坂淡路守京都所司代ト爲ルベキ命ヲ蒙ラレタレバ、翌二年四月廿一日龍野發駕、廿三日大坂ニ着

シ、網嶋鮒宇ニ休憩セラル、コトトナリタルニ付、其際修二御禮ニ出デ、朱子墨本ヲ獻上シタルニ、其挨拶トシテ金貳百疋ヲ賜ハリタリ、

○龍野藩御館入ノ事

龍野脇坂家ハ舊主君ノ事ナレバ、甃菴以來中井家ノ相續人ハ、代々御館入仰付ケラレ、年始暑寒ニハ御機嫌伺トシテ參邸スルヲ例トシタレバ、桐園相續ノ後モ同樣ニ願ヒ出デタルニ、許可ヲ得タレバ、君侯三月九日（年不詳）京着ニ付、十五日御歡旁出頭、御上屋敷ニ於テ御目見ヲ遂ゲタリ、

○懐徳堂永續助成金

安政六年同志中ヨリ懐徳堂永續助成ノ爲、五ヶ年間無利息ニテ金子ヲ用立テラレタルコトアリ、其一札如左、

覺

一　銀四拾五貫目也

内　三拾貫目　宗十郎より

　　拾五貫目　市郎兵衞より

右者爲懐徳堂御永續御助成　當未年より來る亥年迄　五ヶ年之間　無利足ニ而御用立申処實正也　然る上者　右の銀直ニ此方へ慥相預リ　月五朱之利足　年限中積置　滿年之上　元銀御返濟可被下御約定也　尤利積銀之儀者　其節御相談次第ニ取年に致候　爲後日預リ議定證文　仍而如件

安政六己未年正月　　平瀬市郎兵衞○

並河復一殿

中井修治殿

覺

一　銀弐拾貫目也

右之爲懐徳堂御永續御助成　當未年より來ル亥年迄　五ヶ年之間　無利足ニ而御用立申所實正也　然る上者　右の銀直ニ當方江慥相預　年五朱之利足ニ相立　年限滿年之上　元銀御返濟可被下御約定也　右願議定證文　依而如件

安政六己未年四月　　白山彦五郎○

並河復一殿

中井修治殿

覺

一　銀二拾貫目

右之爲懐徳堂永續御助成時節柄格別之御配慮ヲ以　當未年より來ル亥年迄　五ヶ年之間　無利足ニ而借用仕　右之銀左様其元殿へ御預リ之上　年五朱之利足　年限中毎十一月中御渡し被來下候　御約定所次第御坐候　滿年之上　元銀之義理ハ左様其元殿へ御引取可成下候　右借用規定證文　仍而如件

安政六己未年四月　　並河復一○

中井修二○

白山彦五郎殿

○山階宮晃親王御臨校之事

此ノ項ハ別紙懐舊ノ記ニ詳ナリ故ニ畧ス、

○懐徳堂末路ノ窮迫

懐徳堂ノ財政ハ、碩果ガ儉勤蓄積ノ後ヲ承ケ、同志中ノ助力モ少カラザリシ故、弘化嘉永ノ頃マデハ、サシテ窮迫ト

云フニモアラザレバ、文庫ノ建立、逸史ノ出板等ノ事モデキタレドモ、安政ニ至リテハ、財政漸ク不如意ニナリユキタレバ、前條ノ如ク助成金ノ約定モ成立セシガ、文久以後ニ至リテハ、世間漸ク多事、物價益騰リ、校運日々ニ傾キテ、用度給セズ、廣屋ヲ扣ヘテ中並二家多人數ノ衣食ヲ辨ズルハ容易ノ事ニアラズ、困窮ノ狀態、日ニ益逼迫スルニ及ビテ、他ニ財源ヲ求ムル途モナケレバ、已ムヲ得ズ庫二戸前ヲ啓キ、藏書、藏軸、家具、什器ヲ鬻ギテ、窮阨ヲ支持シタリシガ、廢校當時ニ及ビテハ、逸史、詩律兆、通語、非物、非徵、瑣語、質議篇等ノ板木ヲ始トシテ、思ヒ切ッテ遺藏品ヲ賣却シ、以テ僅ニ窮迫ノ家計ヲ支ヘタリ、板木賣渡ノ書類、

永代賣渡申板木之事

一　逸史全十三冊　半株
　詩律兆　非物非徵　瑣語　質疑篇　各半株

右板木株拙家藏板ニ取持來候處　此度代金ヲ以約定七拾五兩ニ相極　其元江永代賣渡し　金子慥ニ受取申候處實正也
然ル上者　右板行ニ付　外方より聊故障申者毛頭無之　爲後一札　仍而如件

明治二年巳十一月　中井修二
加賀屋善藏殿
右同願
二通ニ認渡　中井修二
河内屋吉兵衛殿

覺

一　拙家先代著述通語全三冊　兼而藏板致度趣ニ而　副本所望有之　任其意則讓リ渡候所　相違無之候　就夫爲謝義金拾兩贈リ被下致受納候爲證　仍而如件

明治二年巳十一月　中井修二郎

天滿屋善九郎殿
河内屋吉兵衛殿

覺

一　拙家先代著述社倉私議全兼而藏板被致度趣ニ而副本所望有之任其意則讓リ渡候所　相違無之候　就夫爲謝義金壹兩贈リ被下致受納候爲證依而如件

明治二年巳十一月　　中井修二郎
河内屋吉兵衛殿

碩果一代ニ蓄積シタル圖書什器モ、一朝ニシテ散佚スルニ至レリ、桐園書院ノ經營ニ力ヲ致シ、先業維持ノ爲ニ勞セシコト如何バカリナルヲ知ラズ、豈好ミテ家傳ノ書器ヲ鬻ガンヤ、此ノ間ノ苦衷局ニ當ル者ニアラズシテハ測度スベカラズ、並河教授ハ專ラ學藝ノ事ヲ任ジテ理財ノ途ニ通ゼズ、懷德堂ノ財政窮迫シテ救フベカラザルニ至リテモ、一ニ桐園ノ料理ニ任セテ更ニ關知セザル者ノ如シクナリシ故、桐園ノ書器ヲ鬻グヲ聞キテハ、先業保護ノ責任ヲ盡サヾル者トシテ喜バズ、書籍中竹山ノ題簽アル者ナドハ書林ヨリ買ヒ戻シテ並河家ノ藏書ト爲シタル者モアリ、此等ノ書ニハ左ノ詩ヲ題ス、

及泉盡粥書、況存祖手迹、翁兮馴書肆、償供寒濤籍
九々翁題

寒泉ノ手ニ買ヒ戻サレタルモノハ、幸ニ世上ニ散逸スルヲ免レタレバ、其先哲ノ遺業ヲ擁護スルノ厚キハ我等ノ感刻ニ勝ヘザルトコロナレドモ、桐園ノ鬻書ノ苦衷モ亦眞ニ骨ヲ削ル思アリシナリ、但兩者ノ意志疎通セズシテ、寒泉ヲシテ不快ノ念ヲ抱カシメシハ憾念已ム能ハズ、

右ノ如ク桐園ガ書器ヲ鬻ギシコトハ寒泉ニハ善ク納レラレザリシガ、此ノ間ノ事情ニ通ズル者ハ已ムヲ得ザル事トシテ同情ヲ寄セタリ、但シ當時桐園ガ若廣ク同志親戚等ト謀リ、運用宜シキヲ得シナラバ、假使書器ヲ竭盡ストモ、書院ノ維持ハ如何ニカ立チシナランニ、ト慨嘆スル者モアリタリ、

家藏ノ書器ハ多ク散逸シタレドモ、懐徳堂ヲ引キ拂ヒテ本庄村ニ遷ル時、尚移轉ニ廿八日ヲ費シ、本庄村ノ土藏ニ入レキラヌ者ハ一二ノ親戚ニ預ケタリシガ、其後盗難ニカヽリタル者モアリ、賣却シタル者モアリテ、現存セル者極メテ少シ、唯貴重品トシテ、先哲手書ノ遺著類ヲ存留セルノミナリ、

○懐徳堂ノ遺跡

懐徳堂ノ遺跡ハ、明治二年ノ冬油掛町ノ質屋天滿屋善九郎ニ金參百兩ヲ以テ譲リ渡スコトヽナリ、其後多年間元形ノ儘ニテ空屋トナリ居タルガ、逸見氏ノ手ニ渡ルニ及ビテ、門牆ヲ壞チテ、長屋ヲ建造シ、講堂其他ハ元形ノ儘ニ區劃ヲ施シテ借家ト爲シタリ、其後ノ消息ハ詳ニ知ルヲ得ザリシガ、何年頃ニカ全部ヲ取リ壞チテ、今ノ煉瓦造ノ高屋ヲ見ルニ至レリ、懐徳堂ヲ引キ拂ヒテ本庄村ニ移轉セシハ、明治二年十二月廿五日ト覺ユ、

○懐徳堂廢滅後ノ桐園

桐園ハ明治二年十二月懐徳堂閉鎖ノ後、六年二月マデ本庄學舍ニ於テ家塾ヲ繼續セシガ、同年三月九日、大坂府下第三大区三番校即江南小學校ノ教師ト爲リ、八年六月二十九日ニ準五等訓導ヲ拜命シ、同九年九月十四日一級訓導補ト爲リ、九年十月二十五日五等訓導ニ進メラレタリ、是ヨリ先本庄村ヨリ老松町ニ移リ、後又江戸堀南通ニ移リテ、學校勤務ノ餘暇ニ好徳學院ト稱スル私塾ヲ開キ居リシガ、後學校ヲ辞シ、專私塾ニ教授シテ、十四年終焉ノ時ニ至レリ、上述ノ如ク桐園ノ半生涯ニハ、文庫ノ建立、逸史ノ上梓、學校改築計畫等、多々有望ノ事件アリシガ、其ヨリ後ハ懐徳堂ヲ頽勢ノ間ニ維持シテ、遂ニ廢校ノ否運ニ遭遇シ、爾後ノ餘生ヲ僅ニ小學訓導ニ甘ンジテ、家計窮迫ノ間ニ歿スルニ至レリ、故ニ其死去襄事ノ際、河内ノ親戚稲垣謙藏（菊堂）ガ桐園ヲ追懐シテ「誠ニ御苦勞ナル生涯デアッタ」ト語リシガ、斯ノ一語眞ニ能ク桐園ノ生涯ヲ言ヒ盡セリ、桐園絶筆ノ詩、

庚申歳晩
送窮窮叵去、天命慨其嘆、歳旦今將改、無除此患難、

辛巳新正
茅屋臘塵積、令春未覺春、只從時俗禮、口祝歳擧新、

右ノ二首ハ、余及ビ交游諸氏ニ頒タント欲シテ、幾通カ書シ畢リシガ、幾モナクシテ病ヲ發シ、一月廿九日ヲ以テ歿セリ、其襄事録具ハラザレバ、之ヲ畧ス、

○懐徳堂助教
寒泉時代ニ懐徳堂ノ助教ヲ勤メタルハ、寒泉ノ男蜑街、稲垣菊堂、藤戸寛齋（今木積一路）山村卯之助ノ四人ナリキ、蜑街ノ事ハ寒泉遺事ニ載ス、
稲垣菊堂、山村卯之助亦已ニ卒ス、
藤戸寛齋河内ニ現存ス、

逡巡碑ハ來書ノ如ク雙鈎塡墨ニテ此ヲハヤイシズリト云フ、名物六帖ニ出ヅ、其中ニハ出處モ擧ゲタレドモ、座右ニ是ノ書ナク、且記憶ニ存セズ、シカシ雙鈎塡墨ト云ヒテモ字中ニ塡墨スルニハアラズシテ、字ヲ白ノマヽ残シテ周圍ニ塡墨シ之ヲ普通ノ墨本ノ如ク見スルナリ、逡巡碑ト名ヅケタルハ墨帖ノ如ク石面又ハ板面ニ刻シタル者ナラバ、サホド深ク注意セズトモ、自カラ凹處ニ墨ノツク恐ナケレドモ、雙鈎塡墨ハ平面ノコト故、字畫ノ曲線ノキハマデ墨ヲ塗リユキタラバ、其以上ニハ進マレズシテ、筆鋒ヲアトシザリセシメザレバカナハズ、周圍皆コノヤウニシテツクル

故ニ、カク稱フルナルベシ、併シ是ハ全ク愚按ノミナレバ、當否ハ保シガタシ、
又逡巡竹碑トハ、蘭洲自筆ノ竹ヲ履軒ガ雙鈎塡墨ニシタルモノニテ、竹畫ノ逡巡碑ナリ、之ヲ掛軸ニシテ、履軒自ラカク題籤ヲ付シタリ、因ニ記ス、蘭洲ハ善ク竹ヲ畫ケリ、他ノ圖ヲ作ラズ、履軒ノ逡巡碑ニシタル、蘭洲自筆ノ竹ハ懐徳堂屛風ノ張交ノ中ニアリタリ、
柚園手記ノ中ニ逡巡碑法ヲ記セリ、左ノ如シ

逡巡碑

銕屑好醋調寫白紙上 將墨塗紙背候 乾拂去銕屑 以黃占楷光即似碑本
又 一説ニ銕醬ニテ書スル也 礬ヲ入暫クオドモラシフチノ清ミタル所ニテ書スル也 堅キ紙ハ惡シ ボツコリトシタル紙ガヨシ
以膠礬寫字紙上候乾却用柿油磨墨塗

右ハ何ノ書ヨリカ寫シオキタル者ナルベシ、コレハ幼時寒泉翁ノ話ニモ聞キ自分モ試ミタルコトノアリシ法ニテ、雙鈎塡墨ニハアラズ、履軒ノ法ハ今傳ハラ子ドモ、恐ラクハ此ノ法ニハアラザルベシ、コノ法背後ヨリ墨ヲ塗ルトアレドモ、履軒ノ逡巡碑ハ表面ニヌリタリ、且刷毛ノアトモ見ユレバ、筆先ニテ塡墨シタリトモ思ハレズ、因リテ察スルニ、雙鈎ノ中ニ銕屑好醋或ハ蠟ナドヲ施シ置キ、之ヲ板面ニ貼付シテ、普通ノ如ク墨ヲ塗リタルニハアラズヤト考フ、

履軒遺事拾遺

○左九羅帖畫觚（エクジリ）

履軒ハ動植物ニ付キテモ一見識ヲ具フ、其著ニ左九羅帖及畫觚二本アリ、世人ガ動植物ノ本義ヲ辨ゼズシテ、名稱ヲ混亂セシメタルヲ慨シテ、古ヲ考ヘ今ニ徵シテ、適當ノ名ヲ定メタリ、之ヲ圖ニ顯シテ、名稱ヲ題シタル者ヲ左九羅帖ト曰フ、畫觚ハ其釋名ノ書ナリ、左九羅帖ト題シタルハ、巻首ニ「サクラ」ヲ出シタル故ナリ、「サクラ」ニ付キテハ、竹山ニ櫻字ノ説アリ、石窩ニ櫻字辨アリ、共ニ櫻ノ字ヲ取ラズシテ、海棠ノ稱ヲ正シトナス、然ルニ獨履軒ハ

海棠説ニ從ハズシテ、「カバザクラ」「カニバザクラ」ハ世中ノ「サクラ」ノ母ナリトテ、樺ノ字ヲ當テタリ、司馬相如ノ賦ニ華楓枰櫨トアルハ「サクラ」ノ事ナリト曰ヒ、又六朝ノ江南ノ道宮瓊華觀等ヲ擧ゲテ證ト爲セリ、其他「ウグヒス」ニ青鳥、「カウライウグヒス」ニ黄鳥ノ字ヲ用井、「フキ」「アフヒ」「サキクサ」ニハ葵、「ヤマブキ」ニハ款冬ノ字ヲ用井、「ユフ」ニハ木綿ノ字ヲ當ツルヲ正シカラズトシテ、穀ノ字ヲ用井タル類ナリ、又巻中ニ富士山扶桑木ニ關スル説ヲ掲ゲ、富士ヲ蓬萊山、又ハ不二山、博山ト稱シ、よもぎの山、よもぎがみね、ひろ山、ひろね、神山ナド、我ヨリ古ヲ爲シテ斯ク稱フルモヨカラント云ヘリ、扶桑木ニモ得意ノ説アリ、信濃國その原ノふせ屋ニテ見タリト云フ箒木モ、扶桑木ナリト云ヘリ、扶桑木ノ説ハ亦弊帚續編ノ扶桑匣記ニ見ユ、

○弊帚ノ編次

履軒弊帚ハ舊稿六巻アリ、斯ノ中ヨリ節約シ、又増補シテ、履軒弊帚一巻、弊帚續編一巻、弊帚季編一巻ト爲セリ、之ヲ弊帚ノ正本ト爲ス、舊稿中ニハ、正本ニ採録セラレザル者亦多クアリ、是ノ故ニ世上ニ行ハルル寫本ニハ、舊稿ニテ傳ハレルモアルベク、他ニ異本モナキニアラザルベシ、明遠館叢書中ニ収メタル弊帚ハ、新舊イヅレニモ同ジカラズ、サレバ均シク履軒弊帚ト題シタル中ニモ、編次マチ〳〵ナレバ、弊帚ヲ不朽ニ傳フルニハ、先ヅ正本ニ就キテ次第ヲ定メザルベカラズ、

○四茅議

履軒ノ著書中ニ浚河茅議（弊帚續編）　均田茅議　恤刑茅議　攘斥茅議アリ、之ヲ四茅議ト稱ス、均田攘斥ノ二茅議ハ散亡シテ存セズ、浚河茅議ハ淀川治水策ナリ、今ハ新淀川モ開鑿セラレ、毛間ノ閘門モ設ケラレタレバ、其必要ハナカルベシト雖、直接大阪ニ關係ノアルコトナレバ、履軒傳中ニ記載アリタキ者ナリ、

○履軒言行中ノ拾遺

履軒ノ孝子順孫ヲ敬重愛撫セシコト、亦嵓菴竹山ノ如シ、其遺品ニハ鈴鹿ノ孝子萬吉ガ手折ノ菊花（懐徳堂先哲反故帖ニ貼

附セリ、革島ノ孝子義兵衛ノ屋椽ニテ造リタル手拭掛ナドアリ、コレハ竹山ノ孝女初手織木綿ノ手拭ト共ニ一雙ノ珍ト爲スベシ、

履軒ガ釋大典ト關係アル逸話ノアリタルヤウニ記憶ス、或ハ先哲叢語中ニナキカ、大典ノ北禪詩草ニテモ見タナラバ、何カ取ルベキコトアラント思ハルレドモ、座右ニナケレバ知リガタシ、

柚園遺事拾遺

柚園ノ門人ニ伊藤升菴アリ、今舊篋中ニ於テ其壙誌ヲ發見セリ、此ハ石窩ノ遺稿中ニマジリタレドモ、恐ラクハ石窩ノ作ニアラザルベシ、左ノ如シ、

道靖伊藤君壙誌

君諱信之、字升菴、伊藤氏、小字六藏、號金澤、以字稱、考春達君、妣市原氏、世家大阪、業醫、受學于柚園反求二先生、善詞章、旁綜衆藝、特以篆刻者、受法于中川蝸堂、有出藍之稱、又私淑前川虛舟、頗極精妙、爲人滑稽多智、好諧謔、汎愛容衆、與人交、清濁無所失、娶族人之女、生三男二女、皆夭、以寬政八年丙辰三月廿一日生、以天保二年辛卯四月朔卒、享年三十有六、及卒、其妻有身、三閲月生男、曰萬吉、乃立爲嗣、私謚曰道靖、葬府城南天王寺口繩阪珊瑚寺先塋之次、